

氏名	林 正子
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博乙第 4502 号
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 25 日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則 4 条第 2 項該当)

学位論文題目 博文館「太陽」と近代日本文明論
——ドイツ思想・文化の受容と展開

学位論文審査委員	教授 江口 泰生	教授 田仲 洋己
	教授 金関 猛	教授 本村 昌文
	準教授 西山 康一	

学位論文内容の要旨

林正子氏の学位論文『博文館「太陽」と近代日本文明論—ドイツ思想・文化の受容と展開』は 2017 年 5 月 26 日に、文学の専門書に実績を持つ出版社、勉誠出版より公刊された。A5 版 495 頁索引 24 頁の大著である。1996 年から 2004 年の間に公刊された論文 20 本をもとに編まれている。そのなかに査読付き学術雑誌『日本研究』（国際日本文化研究センター発行）掲載の 3 本、2001 年から 2018 年までの科研費 4 種の成果も含む。

章立ての大見出しは以下のとおりである。

序章 博文館「太陽」までの「批評」の展開

第一部 博文館「太陽」における高山樗牛と姉崎嘲風の活躍

第一章 「太陽」掲載のドイツ思想・文化関連記事

第二章 太陽文芸欄主筆期の高山樗牛

第三章 樗牛追悼の嘲風評論

第四章 姉崎嘲風の「戦争」と「女性」

第二部 ドイツ文明批評による日本文明論の展開

第一章 樗牛と嘲風のドイツ文明批評による日本文明論

第二章	森鷗外による樗牛・嘲風評論への批評
第三部	「新理想主義」の受容と「文化主義」の提唱
第一章	森鷗外の「大学」論と「学問」観
第二章	森鷗外の「文化認識」とオイケン受容
第三章	金子筑水のドイツ思想・文化受容と近代日本精神論
第四章	金子筑水の「両性問題」論
第五章	桑木巖翼の「文化主義」
終章	ドイツ思想・文化受容による近代日本の批評の展開

本書は近代日本の知識人たちが「国民国家」確立期における「国民文化」構築の重要性についてどのように認識したかを明らかにし、どのようにその発展に寄与していったかを明らかにしたものである。特に明治中期から大正期にかけて、日本の知識人が受容したドイツ思想・文化がどのようなものであったかを明らかにしていることが特色である。

その際、対象としているのが総合雑誌「太陽」（博文館）である。思想家・文学者の論説の主要な発信媒体であった。明治28（1895）年1月創刊号の発行部数が285,000部、以後10年以上にわたって毎号約100,000部という破格の発行部数を誇った。雑誌「太陽」は、「国民文化」創成において読者に圧倒的な影響を及ぼした。

第一部は「太陽」における高山樗牛と姉崎嘲風の活躍を論じた。「太陽」におけるドイツ思想・文化の紹介記事の分析に始まり、「太陽」誌上で展開された高山樗牛の批評活動が検討される。樗牛の「日本主義」から「個人主義」への変貌を抑えたとすべく、それらに共通する「我」の存在を説く。そして「我」の存在にはニーチェの個人主義の影響を説く。続いて姉崎嘲風の批評活動が取り上げられる。嘲風はドイツへの憧憬、黄禍論の両方に接し、樗牛の国家観とは距離をおく個人の生き方を探究した。日露戦争期の嘲風の思想には、高山樗牛の施策を継承しながら、「永遠の生命」の思想が萌芽的にみられることが指摘されている。

第二部では、樗牛・嘲風らの文明評論が、文学・芸術分野における国民文化の形成を目指したドイツ思想・文化受容と重ね合わせて考察されるとともに、森鷗外と樗牛の審美学論争、ニーチェ受容をめぐる論争、森鷗外と嘲風の洋行無用論をめぐる論争の経緯がたどられていく。さらに森鷗外については、翻訳批評活動にふれ、日本を相対化する視点の先駆けであったことを論じる。

第三部では、思想家たちの関心の対象が明治から大正にかけて「文明」から「文化」へ移行していく過程が扱われている。とくに「文明」概念から「文化」が自立してゆく過程で、大きなインパクトをもったルドルフ・オイケンらのドイツ新理想主義哲学やその受容の諸相が、森鷗外、金子筑水、桑木巖翼の言説に即して検討されていく。鷗外の「大学」論、「学問」論、筑水の新理想主義や女性の生き方を論じた「両性問題」論とその意義、巖翼の文化主義の提唱や文明論から文化論への推移を辿っている。

終章において、全体の総括がなされ、明治大正期にわたって、国粹的なイデオログ、個人主義、日蓮崇拜と変化した樗牛の思想や、留学者が得たニーチェ、カントらの哲学・思想と知識人との関

係など、さまざまな「文明批評」を網羅的に取り上げ、それらの内実を明らかにしたことが纏められている。

序章でテーマの設定がなされ、一部・二部・三部で個々のテーマを論述し、終章で全体をまとめる、という構成をなしている。最後に24頁に及ぶ索引を備えている。

学位論文審査結果の要旨

学位論文として提出された著書『博文館「太陽」と近代日本文明論—ドイツ思想・文化の受容と展開』（2017年、勉誠出版、A5版495頁、索引24頁）は明治中後期から大正期にかけて、樗牛・嘲風など、時代の先達となったドイツ系知識人が、ニーチェやオイケンなどのドイツ哲学を受容しつつ、日本文明論などの批評活動を展開していった様相をまとめたものである。林正子氏は現在、岐阜大学教授であるが、岡山大学法文学部を卒業、同修士課程を修了したことから、江口泰生が学位論文審査の紹介教員となったものである。

著書の研究内容に対応するため、紹介教員の江口の他に、日本古典文学の田仲洋己教授、日本近代文学の西山康一准教授、ドイツ思想・文化の金関猛教授、日本思想史の本村昌文教授の5名で審査会を構成した。

審査会は2月4日午後6時40分より約2時間、放送大学総演7番教室でおこなった。審査会はまず林正子氏の履歴の確認をした。次に学位請求論文である著書が1996年から2004年の間に公刊された論文20本をもとに編まれていること、著書に査読付き学術雑誌『日本研究』（国際日本文化研究センター発行）掲載の論文が3本収録されていること、2001年から2018年までの科研費4種の成果も含まれていることを確認した。後の質疑応答の際に国際日本文化研究センターの共同研究員として活動していたことも追認された。

また日本歴史学会の機関誌『日本歴史』2018-12月号で書評の対象となり、長尾宗典氏によって書評がなされた。長尾氏によると「ドイツ思想・文化の受容」という問題を明治中期から大正中期の長期にわたって考察した点、「思想史・文学史における考察対象として「文明批評」をとりあげた」点が高く評価されている。この著書が学界で一定の評価を得ていることが確認された。

次に本書が学術上、達成した成果について、その要点を林正子氏より説明してもらった。要点は大きく纏めると二点、一つは明治大正期にわたるドイツ思想文化の受容を明らかにしたこと、もう一つは近代文化人による文明批評を明らかにしたこと、であることが述べられた。

ついで質疑応答が行われた。これだけの情報と、書き手の人生、時代の中でとらえる研究能力には高い評価がなされた。近代の文化人は漢文を読み、訓読文体で表現し、留学もして外国語に堪能で、その研究は大変難しいが、林正子氏にはドイツ語・ドイツ文化への深い知識があり、また文学研究だけでなく思想史も押さえることが出来ていると評価された。

大西祝による「批評論」の位置づけ、樗牛と嘲風の評論活動、樗牛と鷗外の審美学論争、嘲風の「洋行無用」論への鷗外の反駁、鷗外、筑水、嚴翼の評論活動など、明治中後期から大正期にかけて、こうしたドイツ系知識人が、カント、ショーペンハウアー、ハルトマン、ニーチェ、ヴァーグ

ナー、オイケンらのドイツ哲学を受容しつつ、日本文明論などの批評活動を展開していった様相を明らかにした点は大いに評価できると全員の意見が一致した。

思想史としては一人の個人を取り上げて丹念に描くという方法があるが、そうではなく、明治大正期の文明批評言説を網羅的に対象とするのは大変な力量であり、大変な労作であるという点でも高い評価をすることができると全員の意見が一致した。

また本書から派生する問題についても質疑が行われた。樗牛・嘲風らの言説が次の世代にどのような影響を及ぼしたのか。彼らの言説によって大正時代に生命主義が謳われ、それに若い世代が飛びついたのではないか。一方、飛びつくことで思考停止状態が生じたのではないか、そのことと「戦争」との関係はどうなっているのか。「キリスト教」や「天皇」について雑誌「太陽」や近代文明人がどのような姿勢をとっていたか。このような点も論点にしてほしかったという要望もあった。

また疑義も提示された。「太陽」という雑誌を対象とするという方法はメディア研究という側面を持ち、大変重要であるが、森鷗外と桑木厳翼の言説は「太陽」掲載ではないものが多く、資料に質的相違があるのではないかという質問があった。「太陽」から発して別の場へ展開した論争も多く、こうした展開の在り方などは今後のメディア研究の課題になるだろうと思われた。

雑誌「太陽」の言説だけをみると、ニーチェからの影響ということになるが、新カント派の影響を受けているのではないかという質問に対しては、ドイツ哲学の日本移入は十分に明らかになっておらず、これらも今後、研究対象として発展するものであることが確認された。

ニーチェと樗牛の個人主義を結びつけるのは無理ではないか、特に日蓮に帰依するような樗牛の姿勢はニーチェとは真っ向から対立するものではないかという指摘があった。これは質疑のやり取りにおいて、樗牛のニーチェ理解がそのようなものであったという表現の仕方にするべきであったことが分かった。樗牛はドイツ語ではなく英訳によってドイツ文化の知識を得ていたということも委員から示唆され、ドイツ思想・文化を明治文化人がどのような手段で理解していたのかは今後重要な問題点に発展するだろうと思われた。

第三部について、ドイツのトーマス・マンが「文明」と「文化」の違いを説いているのではないかという指摘もあったが、質疑のやり取りにおいて、時期的に少しずれる可能性があるということが示された。

森鷗外著『キタ・セクスアリス』を「性欲史」と訳すのはおかしいという指摘があったが、近代文学の鷗外研究ではそれが通行であるとされ、研究分野による翻訳の相違（「性欲」という訳語）も浮き彫りとなった。鷗外以外でも、樗牛「美的生活を論ず」に出現する「性欲」という言葉は、現代語の「性的欲望」を表現しているというより、「本能の満足に絶対的価値を見出す」という、ニーチェから影響を受けた、或いは樗牛のニーチェ理解にもとづく本能主義的主張と関連したニュアンスの言葉であった。それが他分野から見ると誤解を招くことが分かった。日本思想史やドイツ思想受容史をも射程に入れるならば、近代に用いられた訳語の意味を説明してしてから論述に用いる必要があったかもしれない。

ほかにも論述に重複があるところや、誤植も特に欧文の箇所にも散見することも指摘された。

このように派生する問題点や疑義も提出されたが、多くは今後の研究課題として大きく展開する

問題点であり、むしろ本書の到達によって、照射されて浮かび上がってきた問題点であるとも言える。

近代の評論は漢文訓読スタイルを基調として論述される。こうした文献を原典から網羅的に収集し、読み解き、日本文学の知識や確かなドイツ語力を基盤として、縦横無尽に近代人の文明批評論を展開しうる研究者はそれほどいないと思われる。

前述したように内容的にも本書は、大西祝の「批評論」、樗牛と嘲風の評論活動、樗牛と鷗外の審美学論争、嘲風の「洋行無用」論への鷗外の反駁、鷗外・筑水・嚴翼の評論活動など、明治大正期の知識人がドイツ哲学・思想を受容しつつ、日本文明論などの批評活動を展開していった様相を明らかにしたのだが、それだけでなく日本思想史研究において「文明批評」という新たな分野を開拓してみせたことも評価できる。今後、本書で指摘されたことを土台とし、新たな文明批評論が出現する。本書はこうした研究の契機となることであろう。

以上のような点から、本書は学術上、十分な価値と意義を有するものであると審査会は判断した。したがって、博士（文学）に相応しいと全員一致で合意した。